氏　　名　白井聡子（しらいさとこ）
学位(専攻分野)　博　士（文　学）
学位記番号　文博第357号
学位授与の日付　平成18年3月23日
学位授与の要件　学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻　文学研究科行動文化学専攻
学位論文題目　ダパ語における視点表示システムの研究

論文調査委員　（主査）教授 庄垣内正弘　教授 田窪行則　教授 吉田和彦

論文内容の要旨

ダパ語は，中国西南部のチベット文化圏東端部と漢語や彝語の地域との境界に当たる「川西民族走廊」と呼ばれる地域で話される，少数民族語の1つである。本稿では，仲尼郷麻中村（メト村）で話されるダパ語メト方言を主たる対象言語とする。

この川西民族走廊地域は，少数民族の言語・文化が多彩に分布することで知られる。言語学の立場から見て興味深いのは，この地域に分布する諸言語（以下では「川西走廊諸語」と呼ぶ）が，比較言語学的には相互の系統関係が証明されていないにもかかわらず，多くの類型的特徴を共有している点である。

川西走廊諸語の多くに共通の特徴として見られると言われてきたものの一つが，動詞に付加される接辞による人称の表示である。ダパ語の別の方言を扱った先行研究においては，この言語も人称表示現象を持っているとされている。ところが，現地調査によって収集した資料の分析を通して，ダパ語の人称表示と呼ばれていた現象が，一種のモダリティを表示するものであることが分かった。これは，ネワール語やチベット語などにおいて接合／離接パターン（conjunct/disjunct pattern）などと呼ばれてきた現象に相当するものである。筆者は，このような，ダパ語の述部に表示される，一見人称と相関関係のあるモダリティに関する問題を中心に，研究を行ってきた。研究に当たっては，類似の現象が報告されているチベット語や日本語に関する研究も参考にした。

本論文の構成は以下のとおりである。

第1章では，ダパ語メト方言に関する概説をおこなう。これは中心的テーマの背景となる部分であるが，本稿で扱うダパ語メト方言については過去にまとまった研究がないため，現時点でできる範囲の概説が必要であると考えた。本稿の中心となるのは，第2章および第3章である。

第2章では，ダパ語の2系列の助動詞について，記述と分析を行う。この2系列の助動詞について，先行研究では，人称標示の観点と証拠性標示の観点から言及がなされていた。本稿では，この2系列の述部形式が，その文が発話者の視点を接近させて述べられるものかどうかという，「視点」に関わるモダリティの標示であると結論づける。まず，時制やアスペクトを表示する助動詞のそれぞれが二つの対応した形式を持つことに注目し，助動詞の分類とその機能の記述をおこなう。記述を通して2系列の形式によって表されるモダリティの違いを明らかにする。

第3章では，第2章の考察をダパ語の文全般に拡張し，2系列の述部形式について述べる。特に，視点が近づけられないことを標示する「離接標識」の機能に関する考察が中心となる。ダパ語では，助動詞のない文においても離接標識が付加されうる。動詞や形容詞に生産的に付加される離接標識は，助動詞の離接標識とは異なる特徴を見せる。離接標識の形態と機能について分析を行う。

第4章では，第2章および第3章での考察を元に，接合／離接パターンに関する対照研究を行う。これには2つの目的がある。1つは，同様の現象が見られる言語をいくつか対照することにより，ダパ語およびその周辺言語の持つ地域特徴を見

いだそうとするものである。もう1つは，これまでその定義や位置付けについて論争が行われてきた接合／離接パターンについて，新たにダパ語に関する記述研究を加えて考察することにより，通言語的な定義と位置付けを与えようとするものである。対照研究に当たって取り上げる主な言語は，ダパ語のほか，ネワール語カトマンドゥ方言，チベット語ラサ方言，モングォル語，アワ・ピット語である。地域特徴を考える際には，スタウ語，ムニャ語，チァン語，ルズ語，シヒン語などの川西走廊諸語について観察する。

本研究を通して，次のような結論が得られた。

ダパ語メト方言に見られる2系列の述部形式は，接合／離接パターンを示している。接合／離接パターンは先行研究においては人称の一致あるいは証拠性の一種として扱われることが多かった。ここで言う人称とは，法によって分裂する，発話者／非発話者の二項対立的人称である。この人称の区別は，ダパ語メト方言の述部形式の区別とも一定の相関関係を示す。しかし，ダパ語メト方言の接合／離接パターンに関わる諸現象を観察すると，区別の基準となっているのは人称でも証拠性でもないことが判明した。

そこで本稿では，ダパ語メト方言におけるこの現象を分析するために，「発話者の視点が置かれるかどうか」という基準を立てた。発話者が意図的に引き起こした事態を述べる際にはほぼ義務的に視点が置かれる。しかしそれ以外の命題的内容を述べる文においては，視点の有無は様々な条件と共に分岐する。発話者が主語となり，いわゆる「意志動詞」が述部を形成する文であっても，視点が置かれないこともありうる。視点の有無は，話し手の認識のあり方や発話態度を表明する，モダリティの領域である。

話し手による視点の有無の選択に関連する条件として，次のようなものがある。

まず，発話者が内容に参与する（主語または直接／間接目的語として登場する）文は，視点が置かれる文になることが多い。ただし，未実現（irrealis）の事態を述べる文においては，相対的に視点の置かれない文になりやすい。

第二に，発話者が参与しない内容であっても，発話者がイベント成立の場に居合わせるなど，事実を熟知していることが表明される場合には，視点の置かれた文となる。これは，上記の「発話者の参与する内容」と視点の結びつきから派生した用法と考えられる。発話者の参与する内容を述べる文は，ⅰ発話者がイベント成立の場に居合わせる，ⅱ事実を熟知している，といった状況を伴っていることが多い。ここから類推された派生的用法として，このⅰ，ⅱの条件がそろった文についても視点を置いて述べることが普通になっているのではないかと考えられる。

非意図的事態を述べる文については視点が置かれにくいという特徴が見られる。これは，ⅰ，ⅱの条件がそろいにくいことと関係していると考えられる。

第三に，聞き手が主語となる文では，待遇表現と見られる現象が観察された。話し手の視点は置かれにくく，聞き手の視点は優先的に置かれる。聞き手は，陳述文においては非発話者，疑問文においては発話者として扱われる。そこで，主語が聞き手である場合，陳述文では発話者の視点が置かれにくく，疑問文では視点を置いた表現が好まれる。

ダパ語の接合／離接パターンにおいては，接合形は原則として無標，離接形は接尾辞ないし助動詞によって標示される。この，離接形を表示する要素である「離接標識」について，以下のような分析を示した。

助動詞に付加される離接標識には2種類がある。過去の -a と非過去の -jɛ である。このうち，-a については，動詞類に直接付加されても離接標識として機能することから，生産的に離接標識として用いられると言える。一方，-jɛ は視点の置かれる文を形成することがあり，一概に離接標識とは呼べない特徴を持っている。そこで，-jɛ が結びついて離接を表すものとして語彙化した形式においてのみ，-jɛ は離接標識となっていると結論づけた。助動詞，存在動詞，コピュラ動詞の例がこれに当たる。それ以外の動詞類に付加される -jɛ は，離接標識ではない。離接標識としては未完了B系列助動詞が用いられる。

以上のダパ語に関する研究をふまえて，接合／離接パターンについて通言語的に考察するべく，接合／離接パターンに関していくつかの言語を対照し，その特徴を述べた。これまで接合／離接パターンなどの名で呼ばれてきた現象は，ダパ語のような視点標示型と，ネワール語のような人称標示型に分類することができる。先行研究において，接合／離接パターンが一致の一種として扱われてきたのは，人称の制限が非常に強いネワール語を代表的な言語と考えていたためである。しかし，現在分かっている範囲では，ネワール語タイプの接合／離接パターンを持つ言語はむしろ少ない。

複数の言語に見られる接合／離接パターンを対照する中で，ダパ語の持つ個別的な特徴も示すことができた。ダパ語はチベット語に近い特徴を多く持つが，いくつかの点では異なっている。チベット語においては，家族など発話者の身近な人物が発話者と同じ扱いを受ける場合があるが，ダパ語ではこの点は顕著ではない。ダパ語では疑問文において接合形が顕著に優勢であるが，チベット語などにはその特徴は見られない。

川西走廊諸語のいくつかには，ダパ語と共通の特徴を持つ視点標示型接合／離接パターンが存在すると考えられる。しかし，先行研究において視点の標示に着目した記述はあまり行われていない。本稿の研究結果は，この視点の置かれ方に関わる現象が川西走廊諸語における重要な地域特徴の一つである可能性を示唆している。川西走廊諸語の記述的研究を進展させ，この問題を解明していくことを今後の課題とする。

論文審査の結果の要旨

本論文は，シナ＝チベット語族チベット＝ビルマ語派に所属し，中国四川省甘孜チベット族自治州で話されるダパ語メト方言の記述研究である。特に発話者の視点を表示する形式に関する問題を中心に論じられている。

本論文は，4章から構成されており，第2章「助動詞による視点表示」と第3章「離接標識」とが議論の中心になっている。第1章「ダパ語メト方言概説」は導入部に当たる。第4章「対照言語学的研究から見る地域特徴」ではダパ語と類似の現象をもつ他言語との対照研究を行っている。

本論文（和文A4判284＋xviii）の内容は以下の通りである。

第1章では，先ず，ダパ語メト方言の地理的分布，使用状況，周辺言語との関わりなどを概観し，次に音声・音韻について整理し，形態，統語に関する諸特徴を記述した。すなわちこの言語の全体像を概説している。

ダパ語に関する先行研究は，別の一方言すなわちダト方言に関する文法概説と語彙リストがあるのみで，メト方言についてのまとまった記述は無かった。

第2章では，助動詞に関する問題について分析を行った。ダパ語の助動詞は，動詞に付加されて時制やアスペクトを表示する機能をもつが，それぞれの時制・アスペクトについて2種類ずつの形式が存在する。本論文では，これをA系列，B系列と呼んでいる。ダト方言を扱った先行研究では，これに対応する現象が主語の人称を表すものとしている。すなわち，A系列の助動詞が1人称を，B系列の助動詞が3人称を表示しているとするのである。また，2人称の扱いは疑問文かどうかで異なり，陳述文では3人称と同じ形式，疑問文では1人称と同じ形式を用いるとされてきた。ところが，論者はメト方言の一次資料から，主語が1人称でなくても，話し手が直接参与した出来事を述べる場合はA形式が用いられるなど，人称では説明しきれない事実を明らかにした。論者はこの現象を，発話者／非発話者という人称の区別を用い，また，日本語研究で用いられる「視点」という概念と，それを援用した「視野」という概念を用いることによって説明する。発話者／非発話者というのは，法によって分裂した人称の区別であり，陳述文の主節における1人称と，疑問文の主節における2人称，さらに引用型埋め込み文の内部における本来の話し手と一致する人物の三者は同様に扱われるものとする。そしてこれを「発話者」とし，それ以外の人称を表す「非発話者」と区別している。この区別は，日本語の感情動詞やチベット語の助動詞に見られる区別と同様のものであるという。A系列，B系列という助動詞の違いは，この「発話者」の視点が置かれているかどうかを表示するものであると主張する。そしてこの区別が，話し手の認識のあり方や発話態度を表明する，モダリティの領域に属しているとする。発話者が内容に参与している文や，発話者が事実を熟知していることが表明される際には，A系列の助動詞が用いられることが多いのに，聞き手の行為を述べる文では，この条件と関係なくB系列が用いられやすくなるという。また，非意図的事態を述べる文については一般にB系列が用いられやすいが，これはイベント成立の場が発話者の視野の範囲内にないものとして扱われるためであると説明する。さらに疑問文においては視点の中心は聞き手に移るとする。このように，視点という概念を用いることによって，A系列とB系列の区別を一貫して説明できることを論者は明示した。

第3章では，A系列とB系列を区別する形態素についての記述と分析がなされている。A系列とB系列の区別は，現代チベット語などに見られる「接合／離接」の区別に対応するものであるが，ダパ語メト方言ではB系列すなわち離接形が，語幹に接尾辞を付加することによって形成されているとし，この接尾辞を「離接標識」と呼んでいる。離接標識には，過去

の -a と非過去の -jɛ とがあり，過去の離接標識 -a は動詞類の語幹に直接付加されても離接標識として機能することから，生産的に用いられているという。一方，非過去の接尾辞 -jɛ は，動詞類の語幹に付加されると視点の置かれる文を形成することがあり，一概に離接標識とは呼べない特徴を持ち，限られた語類としか結びつかない標識であるとする。助動詞，存在動詞，コピュラ動詞の例がこれに当たるという。これら以外の語類に付加される -jɛ は，離接標識とは別の，発話者の意志が及ばない状態を表す接尾辞として扱う必要があるという。

第 4 章では，ダパ語の A 系列，B 系列の区別と同様の現象が報告されているネワール語など周辺言語と対照し，これまで「接合／離接パターン」と呼ばれてきた現象が，ダパ語のような視点表示型と，ネワール語のような人称表示型に分類できるということを提案する。論者のこの提案は，接合／離接パターンの通言語的研究にとって重要なものである。

ダパ語が話される中国四川省西部は，話者数千人から数万人程度の少数民族言語が密集する地域であり，言語学上注目されている地域であるが，各言語の記述研究は進んでいない。論者は頻繁に現地調査を実施し未知であった言語の構造をその一部ではあるが簡潔に記述した。論旨も明快である。その内容がチベット＝ビルマ系言語の研究や，視点に関する通言語的研究に貢献するところは大きい。しかしながら，枠組みにはなお不安定なところもみられ，また第 4 章においては資料の制約からか記述に不十分な点もある。だが，いずれも近い将来に修正されるものと期待できる。

以上，審査したところにより，本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお，2006年 2 月17日，調査委員 3 名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果，合格と認めた。